



濁の土を取る様子 (ジョレン掻き)

# 【第四章】客土一寸、一石の増収

— 芦沼農民の暮らし —

ではの大きな役割を持っていた。湖底に積もった埃土(有機物を含む泥)である。この埃土は客土として、いかなる肥料にも勝る滋養分を持っていた。

「地図にない湖」と呼ばれた亀田郷の溜田地帯。農民は自分の田を一センチでも高くするため、烏屋野潟などの底に溜まっている埃土を田に入れた。濁の土はジョレンという器具で掻き上げ、舟に載せて田まで運ぶという気の遠くなるような作業であった。

客土一寸で一石の増収を生むとも言われた。この埃土は、集落ごとに採る場所が決められているほど貴重な資源であった。魚も大きな収入源であり、漁業権もあった。この溜湖で獲れる鰯(屋根材)や真蛸(生活材)、菱(食材・薬)、水草なども現金収入を助けた。

## 【舟堀】

この地における主な移動手段は舟であった。郷内には百本を越える舟堀(水路)が縦横無尽に走り、集落をつないでいた。

むろん、この舟堀は田の水路であり、排水も兼ねていた。舟は、特に稲刈りの収穫時には欠かせない運搬具であり、大抵の農家が二、三艘は持っていた。この舟堀も田植えや収穫時には舟で漕ぎ回すため、下流の後発農地では作業時期をずらすため早生を作るといった慣行もあったという。

通常の村の道は一メートル幅ほどの草道。主要道路も幅二メートル、対して舟堀は三・六メートルもあった。



舟堀

ハサ木



## 【江丸】

この地は洪水の常襲地帯であるため、水防には様々な工夫がなされていた。各集落は村の周囲に「江丸」という高さ一メートル弱の小堤防を築いて、自分の田畑に悪水が流入してこないようにした。郷内にはこうした大小様々な江丸が無数にあったという。いわば、小さな輪中である。しかし、こうした集落単位の水防体制は明治後の水利組合を作る際の難題となり、水利の近代化を遅らせることになる。

## 【田打ち】

亀田郷の春仕事は早い。正月行事(二月)が終わるとすぐに田打ちに出る地区もあった。水の張った田に出る野良者はヤマギモンと呼ばれ、股引き、藁ハンパキ、ミノ前掛け。女子も膝までの腰巻の他は男子と同じ。濡れると翌日凍るので、両足裏に干して、かわるがわる履いたという。



水車による取水

悪い深田での様子である。微高地の良田では普通の田植えがなされた。標高二・三メートルというわずかな差が天雨と地獄のような違いを生んだことになる。

作家の司馬遼太郎は、「芦沼」という農作業の記録映画を撮ってこう述べている。「食を得るといふた一つの目的のためにこれほどはげしく肉体をいじめる作業というのは、さらにはそれを生涯くりかえすという生産は、世界でも類がないのではないか(『街道をゆく』海のみち)」

## 【ヒル箱】

田植えが済むと三日ほどの休暇。その後の除草作業はどろどろの圃いであった。大正の初期まで郷内の農民はヒル箱を腰にぶら下げていた。ヒル箱とは直径一五センチ、深さ九センチほどの桶。この中に塩や石灰などを入れておき、脚を登ってくるヒルを取り桶に入れて殺す。多い日は、一日一台もそれと言われ、この苦行が秋の稲刈りまで続いた。

## 【一用水】

用水は大半の農地が堀の水を利用した。水車を使って汲み入れるという重労働である。また田越し灌漑の田も多かった。日照りの時に、水の不足する田では隣の畔の下に棒で穴をあけて水を盗む者もいたという。このための棒を「天氣棒」といった。

## 【稲刈り】

稲刈りもまた水につかっていた作業だった。刈るには下半身の力も要るので、足が粘土質の泥にとられて動きにくい。このため竹棒を何本か編んだカンジキを履いた。さらに深田では箱カンジキも履いた。竹棒数本の上に箱を乗せたものであり、転ぶと足が浮き上がって起き上がれず、命取りにもなったという。稲刈りが終わると十二月、ハサ稲に雪のかかることもしばしばであった。

## 【冬仕事】

冬場は深くつ、米俵、脚半、ツグラ、荷縄、背負い籠、ムシロ織、ミノづくりなど、農閑期といえど朝から暮らう夜なべに用器裏の灯りで俵を編むという暮らしであった。



泥田での田植え



刈った稲穂を船積み